

## 原田先生のこと

山口 修

原田淑人先生は昭和四十九年十二月二十三日、九十歳に垂んとする長寿を以て薨逝せられた。ここに本誌が、先生を哀悼する特集を編むに及び、偶々私が先生の迹をけがして本学の東洋史学講座を担当するが故に、先生について一文を草することを求められた。しかし私は学界に關しても、また本学に關しても、先生の業績を語る資格は有っていない。たしかに私は、先生の講筵に列したけれども、最末期の門弟にすぎず、私が学生であったときに、先生は定年を以て退官せられた。そして本学に転ぜられたが、私が本学に専任の職を得たとき、先生また正式に現役から離れて名譽教授となられたのである。しかしながら、先生と同じ道の一端を、はるかに遅れて歩んできた者として、その任にあらざることには十分にわきまえつつ、限りなき哀惜の心をこめて、先生の偉大なる学者としての生涯を偲ぶことしたい。

○ ○ ○

先生は明治十八年（一八八五）四月五日、東京は神田の小川町で生誕された。そして開成中学校、第一高等学校を

へて、明治四十一年(一九〇八)七月、東京帝国大学文科大学史学科を卒業された。大学における専攻は東洋史学であり、卒業論文として提出されたのが、後段に掲載する『明代の蒙古』であった。

大学における同僚としては、二年上に加藤繁氏、一年上に羽田亨氏があり、同級には橋本増吉氏があった。いずれも先生と並んで、その後の東洋史学界をひきいられた方々である。そうして当時、教授として先生方を導かれたのは、中国史学の泰斗たる市村瓊次郎氏のほか、兼任教授(本務は学  
院教授)として白鳥庫吉氏があり、とくに白鳥教授は西域史や満蒙史を講じ、先生に対しても大きな影響を与えたことと考えられる。なお先生は、その卒業論文を見てもわかるように、在学中は特別に考古学を指向してはおられない。

卒業後は大学院に入って、更に東洋史学の攷究をすすめる(大正二年まで)、その間しだいに考古学への関心を深められた。大正二年には研究室の副手となり、翌三年には講師となる。そして十年八月、三十六歳にして助教教授に任ぜられ、九月からヨーロッパ留学を命ぜられた。目的は考古学の研究であった。これより二年あまりを欧米に過ごし、あまたの成果を得て帰朝した後は、知見もつとも豊かな考古学者として、京都大学の浜田青陵氏と共に、学界の指導者として立つことになられたのであった。

この後における先生の業績は、改めて述べるまでもないであろう。

先生は、いわゆる東洋考古学の開拓者であり、調査の対象をえらぶにも、主力は大陸の遺跡に注がれた。その成果は、つぎつぎに巨冊として刊行され、世界の学界の注目をあびた。すなわち大正十四年の発掘にかかる楽浪の王盱墓は『楽浪』(昭和五年  
東大文学部)の題のもとに、その全容が明らかにされる。大正十五年には中国の学者と協同して東亜考古学会を設立し、以後は学会の名において中国各地の調査が行われた。先生の担当されたのは、昭和三年における旅順の漢代遺跡『牧羊城』(昭和六年刊)、八年から九年にかけて渤海の古都『東京城』(昭十四年刊)、十二年における内蒙古の

元代遺跡『上都』（昭十六刊）等であり、これらの報告書は日本考古学界の偉大な成果として、いまなお洛陽の紙価を高めている。

さらに先生は、発掘の技術において卓越しておられたばかりではない。その漢学に関する深い学殖は、難解な古典籍を読破するに役立った。おびただしい量にのぼる史書のうち、服飾に関する部分は、その実物に接することが難かしいため、これを解明することが古来きわめて困難とされてきた。それに先生は初めて取組まれたのである。幸にしてわが国には正倉院がある。天平の遺宝を調査された先生は、文献と遺物との双方から、古代の服制を明らかにしてゆかれた。その成果は、まず『支那唐代の服飾』（大正九年）として著わされ、ついで『西域発見の絵画に見えたる服飾の研究』（大十四）となり、さらに『漢六朝の服飾』（昭十二）として結実した。この分野においても先生は開拓者であった。

以上の大冊のほか、各書誌に発表された論文の数もきわめて多い。それらは『東亜古文化研究』（昭十五）、『東亜古文化論考』（昭三七）、また米寿記念の『東亜古文化説苑』（昭四八）などにまとめられている。これらの書をひもどくときは、先生の学問の深さと共に、その広さにも驚くであらう。文献と遺物との渉猟は、まさしく古今東西に及んでいる。しかも先生は米寿をこえてなお、研鑽をとどめられることはなかった。

○ ○ ○

ところで先生は東大において、考古学講座が設けられぬまま、東洋史学科に籍をおき、久しく助教として過ごされた。漸く昭和十三年に至り、講座が開設されると共に教授に任ぜられたのである。すでに五十三歳であった。このように東大においては、ある意味で冷遇されたけれども、学界が先生を認めるところはすこぶる高かった。すなわち

昭和十八年には、東大の現職のまま学士院会員に列せられ、退官の翌年（昭二〇）一月には講書始めの儀において、漢書の進講を仰せつけられた。このときのテーマは中国の山西省大同における北魏の平城址の発掘調査であった（昭和十四年調査）。

教室における先生の講義が懇切をきわめたものであったことは、聴講した門弟の齊しく認めるところである。研究室においても、つねに先生は慈父のごとく、考古学研究室のなかは、演習の行われている時と否とを問わず、先生を中心に和氣に満ちていた。私のように考古学の専攻でない者でも、その空氣にふれることが楽しく、先生の許に入りびたっていたわけである。

生来、酒を好まれた先生は、喜びの事ある毎に、研究室で宴を開かれた。そこには講師陣をはじめ、すでに高名の先輩たち、さらに学生たちも招かれた。私が学生であったころは、あたかも戦中戦後の万事が乏しかった時代にも拘らず、先生の徳を慕って集まった珍味が、机の上いっぱい並べられ、日の暮れるのも知らずに談笑がつづけられたものであった。

こうして定年の後、先生は聖心の専任教授となられたが、本学における先生の講義は勿論のこと、学内の様子も私は直接には知らない。しかし先生は聖心の学風を愛され、お会いするたびに「ぼくは東大より聖心のほうが長い、むしろ聖心のほうに強い愛着を持っているんですよ」と、つねに語られていた。受講された卒業生のお話を伺っても、先生の講義は魅力あふれるものであったという。私の体験に照らしても当然のことと思われる。

○ ○ ○

いま先生の論文をあたってみるに、この『聖心女子大学論叢』が発刊されてから後は、主要な論考の大半は本誌に

発表されている。バックナンバーをしらべてみても、第二集（昭一七）より第三十七集（昭四六）までほとんど毎号のよう  
に先生の署名を見出だすことができよう。なお、そのことごとくは『東亜古文化論考』および『東亜古文化説苑』  
に収載されている。

ところが先生の論文のうち、著書のなかに収められなかったものが、ただ一つあった。最も若いときの論文『明代  
の蒙古』である。卒業論文でありながら、稀に見る力作であった故に、提出された年、すなわち明治四十一年、雑誌  
『東亜同文会報告』に三回にわたって分載された。

これは元朝の倒壊後、明代において蒙古がどのような形勢となり、蒙古民族がどのような動きを示したかを、こま  
かく論述したものである。当時としては、まさしく前人未踏の分野であった。しかも先生は『明実録』をはじめ、あ  
らゆる文献をくまなく検討し、一一の史実を確かめつつ、精緻なる論を立てられたのであって、それが明治末期の学  
生の論文と知るときは、誰しも一驚を喫するであらう。蒙古の歴史は、ここに新しく開拓せられ、その後の研究の基  
礎が形づくられた。

しかしながら発表されたのが特殊な雑誌であり、先生が研究の方向をかえられたためもあって、大正から昭和に至  
る間に、このような大論文が先生にあることは忘れられてしまった。ただ和田清氏をはじめ、先生に近い方々の論文  
に引用されているところから、僅かにその存在を知るに過ぎぬ状況となった。雑誌そのものも散佚してしまい、その  
名を知っても求められぬところから、幻の論文となってしまうのであった。

先生の追悼を特集するにあたり、令息正巳氏の尽力によって、ようやく件の雑誌を入手することができ、ここに学  
界から消えて久しい論文を覆刻することができるのは、私たちにとって大きな喜びである。先生も生前から、この論  
文がふたたび世に出ることを最後の願いとしておられた。これを学界に提供することは、先生の遺志にもしたがうこ

ととなる。些か事由を記し、拙文を閉ぢるに当って、謹しんで偉大なる先生の御冥福を祈りたい。